

# 中世

II-1-①

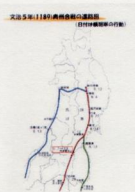
## 阿津賀志山

奥州合戦の天王山の古戦場

平泉を目指す鎌倉勢は、大手軍、浜通り、日本海上合戦を経て28万4千騎（吾妻鏡）と称され、大手本陣の深根朝・高山重忠1万騎千騎に対し、平泉軍は、西本戸太郎国衡を大将軍に、副金剛別当秀綱（名取熊野学詰別当）とその子千道房太郎秀方等の2万騎を差し向け、阿津賀志山へ城壁を築き二重堀と堅塁を抜き鎌倉勢を迎え撃つことになった。

文治5年（1189）8月8日合戦が開始され、8月10日には下道房太郎秀方戦死、大将軍国衡は柴田郡まで敗走戦死と阿津賀志山の陣は2日間をやぶられ、国分が原に本陣をしく藤原泰衡も北方へ退却するに至った。

II-1-②



II-1-③

文治5年（1189）奥州合戦後、名取郡の地頭に相田義隆が任命されましたが、建暦3年（1213）北条氏に滅ぼされ、その後任に三浦義村が繼いだ。しかし、室治合戦（1247）で三浦氏も北条氏に滅ぼされ、名取郡の所領は執権北条氏の惣領（得宗）となる。その後、鎌倉幕府滅亡後名取郡は無主の地となり、南北朝時代を通じて勢力拡大を競う武士団の争奪場となった。

岩切城合戦（1351）の直後、伊達・田村氏等の南朝勢が名取郡へ出撃、吉良貞家の大群を撃破する。この時、北朝勢は名取郡高館山の羽黒城（高館城）を本拠に南朝勢に対抗した。応永13年（1406）以後名取郡内各地には伊達氏の家臣を配置する。天文11年（1542）以降、名取郡は伊達氏の支配が固まり伊達氏固有の領城となる。

II-1-④

## 名取熊野三社

II-2-①

熊野信仰は、紀州熊野の自然を信仰化した自然崇拜の形態を起源としており、熊野本宮（主神は東津御子神）、熊野新宮（速玉神・イザナギノミコト）・熊野那智神社（夫須美神・イザナミノミコト）の三社信仰となって具体化します。一般的に地方に勧請されたものは三社が一統になって熊野神社という形をしていますが、名取の場合は三社それぞれ建立されました。名取熊野三社は、東北の太平洋岸沿いにおける熊野信仰の拠点として繁栄を集めました。

なお、平安末期、神仏習合で宋法思想の流行により、本宮の本地仏は阿耨陀、新宮は薬師如来、那智は千手観音として、武士はもとより民衆の間にも浸透していきました。

名取の熊野集団は、金剛学詰別当秀綱の時、奥州平泉藤原泰衡の後見役（吾妻鏡）として強大な勢力をもっていました。

II-2-①



II-2-③



II-2-②



高館丘陵の遺景

II-2-④

II-2-④